

自我境界概念から見た自我機能概念の再検討

森田修平・岡本祐子

A review and some considerations on the concept of ego functions
from the view point of ego boundary

Shuhei Morita and Yuko Okamoto

精神分析学においては自我はさまざまな機能を持つとされ、今日まで Bellak らをはじめ、多くの研究がなされてきた。また、その測定法は、質問紙、ロールシャッハ・テストなどの投射法と多様である。しかし、自我機能の測定は、自我という概念の扱いの難しさから困難さを指摘されてきた。大山による一連の自我境界研究から、各種自我機能が異なる自我境界領域で働くことが推察された。本研究において、各々の自我機能がどの自我境界領域で機能するのか、それぞれの測定法がどの自我領域を対象にしているかを検討することにより、より妥当性の高い自我機能研究の可能性が示唆された。

キーワード：自我機能，外的自我境界，内的自我境界

はじめに

鐘・一丸・名島・山本 (1998) は、精神分析の我が国への流入について、「諸外国におけるように学派による激しい対立や論争の歴史はなく、種々の学派をあまり区別することなく受け入れてきた」と述べている。また、小此木 (1971) は、「そもそもわが国の精神分析理解には、系統的な教育過程が欠けているために、丁度この本書の内容をなすような基礎知識が意外に乏しいように思う」と記している。40年たった今も、日本において多様な精神分析理論が呈示されながらも、多くの心理臨床家はその背景を理解し、活用に至っているかは不明である。そこで本論では、精神分析理論の中でも自我心理学における自我とその機能に改めて着目し、その展望を試みる。

1. 精神分析理論における自我機能 (ego functions)

自我とは、広義には人の行動と、意識を含む心的経験の主体と認められるもの、および主体と同じような意義を与えられる客体的な心的内容と定義される (北村, 1981)。小此木・馬場 (1977) は、「フロイトはこの言葉を漠然と用いており、主として二つの用い方をしていた。つまり、その一つは他の人々から区別される身体をも含めた一個の全体としての「自己」という意味であり、他の一つは、特有な属性、機能によって特徴づけられるような心の一定機関としてである」と述べている。

また、馬場 (2008) は、自我、エス、超自我からなる構造論について、自我は「これは私です」と守らなければならないもの、エスについて「私でないもの」と説明し、自我が、「これは私です」ということを守るため、「私でないもの」であるエスを閉じ込める作業をする機能をもっていると述べている。つまり、自我とは、私であり、また私を構成し、守るために必要な働きそのものと考えられる。そして、その機能は自我機能 (ego functions) と呼ばれている。自我機能は、Freud (1923 中山訳 1996) の自我論に始まる、自我心理学の歴史の中で理論化されていった概念であり、中西・古市 (1981) に詳細にその歴史がまとめられている。自我機能は、その要素を分解していくと、その自我、エス、超自我という構造論への対応法をはじめとして、さまざまな働きが存在すると言われている。馬場 (2006) は、ロールシャッハ・テストを例に挙げ、観察を重ねて内的力動とそれを動かす自我の機能状況を読み取ることが、パーソナリティ査定をする上で重要な過程であると述べている。

神谷 (2011) は、従来の代表的な自我機能の分類として、Bellak, Hurvich, & Gediman (1973) の現実検討、判断、外界と自己の現実感覚、欲動・感情・衝動の制御と統制、対象関係、思考活動、自我による自我のための適応的退行、防衛機能、刺激障壁、自律的機能、総合―統合機能、支配―有能性機能からなる 12 の自我機能分類、Weiner (1966) の思考活動、現実との関係、対象関係、防衛操作、自律機能、統合機能からなる 6 つの自我機能分類、馬場 (2008) の現実機能、防衛機能、適応機能、対象関係、自律機能、統合機能からなる 6 つの自我機能分類の 3 つを挙げている。

2. 自我機能の測定

このような自我機能をアセスメントしていく方法として、さまざまなものが開発された。

1) 質問紙による検討

中西・古市 (1981) は、12 の機能から、質問紙形式にしやすい 9 機能を取り上げ、自我機能調査票 (Ego Functions Inventory-1, EFI-1) を作成し、そこからさらに、項目の選定、虚偽尺度を加えて、EFI-2 (72 項目、7 件法) を作成した。EFI-2 に採用された 8 因子は、総合―統合機能と支配―有能性からなる、①総合・統合機能―支配・有能性、②外界と自己の現実感覚、③動因・感情・衝動の制御と統制、④対象関係、⑤防衛機能、⑥刺激障壁、⑦自律的機能、⑧現実検討である。また、中西・佐方 (1989) は、健常者を対象とし、現実検討因子を削除し、項目数を減らした EFI-2 の短縮版を作成した。ただし、短縮版は各尺度の信頼性が不十分な側面も認められる ($\alpha=.563\sim.787$)。

EFI を用いた最近の自我機能の実証研究には、以下のものがある。杉本 (2002) は、EFI を用い、青年における対人恐怖心性と対人不安に影響を及ぼす自我機能の諸側面について検討しており、他者からのささいな否定的評価でも自己価値が傷つき、容易に回復しないといった傾向が、対人関係の回避傾向につながる可能性を示唆した。梶本・金城 (2009) は、フロー経験と EFI における自我の総合―統合機能の関係について検討を行い、フロー経験の多い大学生は、自我の総合―統合機能が高いことを示した。山本・中野 (2005) は、中学生の自我機能について、EFI を用い 1981 年時と 2004 年時を比較し、全体として EFI 得点が低下していること、男子中学生は動因・感情・衝動の制御と統制が上がり、女子中学生は刺激障壁が上がっていることを示した。

一方で、質問紙によって、自我機能を捉えることについての批判も存在する。川畑 (1985) は、EFI とロールシャッハ・テストの各指標の相関から、EFI の妥当性を検討し、質問紙法と投影法という検査方法の差について、「質問紙法において自我機能を測定しようとする場合、その妥当性が被検者の現実検討能力の確かさに影響を受けるという矛盾を抱えている」と EFI の妥当性の再吟味の必要性について述べている。また、宅 (2002) は、自我の強さや自我機能について、それらを独立変数の一つとして扱った研究は散見されるものの、自我の強さや機能をより促進する要因に関する研究がほとんどみられないことを指摘している。山本・中野 (2005) も量的研究後の事例検討の結果から、前述の研究について自我機能の特性よりも自我機能の状態を反映しやすいのではないかと考察しており、質問紙における自我機能測定の難しさが認められた。

また、新たな自我機能を測定する質問紙として、馬場・鈴木・竹内・松本・長谷川 (2000) は、Bellak の理論と日本の心理臨床の知見を加えて、自我機能と個々の防衛機制の両方を同時に測定する尺度の作成を試みている。しかし、その後標準化等の報告が見られない。

神谷・西原 (2006) は、自我機能概念の再検討を行い、①自我機能は明確に区分できるものではなく、相互に機能が重複していること、②日常的に問題がなくとも、問題の多い過酷な状況におかれると、自我機能は全般に低下する可能性、③自我機能のあり方を短時間で捉えることは困難であるという問題点を指摘している。特に、③について、「自我機能が意識のみならず必ずしも自覚されていない領域での機能も少なくないため、自己記入式の質問紙法の心理検査だけでとらえるのは当然困難である」と述べている。この点は自我機能を研究する上で重要な観点である。

また、自我機能として、エゴグラムによって検討を行った研究も見られるが、本論では割愛する。

2) 面接による検討

自我機能アセスメントのための面接法として、EFA (Ego functions Assessment) がある。EFA とは、Bellak 自らが考案した自我機能評定法であり、臨床的面接によるもの、実験的手続きによるもの、既成の心理検査によるものの3種類がある。臨床的面接によるものは、12の自我機能の構成要因それぞれに、3～11の質問項目と評定基準からなる。この臨床的面接は、主として海外で用いられている。例えば、Sohlberg & Norring (1995) は、摂食障害者に約6年の追跡調査を行い、摂食障害の改善が見られた人は、自我機能も強化されていることを示した。Juni & Stack (2005) は面接法で用いる質問を、4件法かつ自己報告式に作り替えたEFAを用い、静脈注射による薬物乱用者とそうでない者を比較し、現実検討機能や判断機能、現実感覚の低下などといった自我機能のパターンの違いを見出している。また、Basu, Basu & Bhattacharyya (2004) は、EFAとストレスライフイベント、アイゼンク性格検査における精神病質傾向の項目と不安、抑うつを回帰分析によって検討し、自我機能の対象関係が精神病質傾向、不安、抑うつ全てと関連することを示した。また、今江・斎藤 (2005) は、文献研究によって、「自己受容」の構成概念に Bellak の分類した自我機能概念の諸要素が関係していると試論している。Juni, Stack & Burton (2000) は、EFAについて、麻薬・覚醒剤使用者に対し、2週間間隔をおいての再検査法を実施したが、EFAの各項目の信頼性が芳しくなかった。この結果について、EFAによって測定される自我機能は「状態」、「特性」のいずれを示しているのかの

再考の)要性を指摘している。また、Juni & Strachle (2002) は非臨床群を対象にEFAの検討を行い、再検査法によるEFAの信頼性は十分であり、非臨床群において自我機能を測定するツールとなりうることを示唆している。

3) 投映法による検討—ロールシャッハ・テスト, TAT—

ロールシャッハ・テストは自我機能を測定するツールとして有用とされている(馬場, 2006)。ロールシャッハのような漠然とした図形とテスト場面を与えた時、被検者の自我機能はいかに働くかを知ることができる(河合, 1973)。反応内容や反応時間だけでなく、呈示されたカードという刺激に対して、それを安易に受け入れるのか、刺激に内界が揺さぶられるのか、揺さぶられ口に出にくい反応をつい出してしまうのか、あるいは刺激に固まってしまうのかなどを被検者の様子から考察することにより、被検者の自我機能がどのように働くかを検討し、外的行動を予測するのである。

ロールシャッハ・テストの指標には、通常算出される各スコア以外にも、自我の強さを測るとされる、ロールシャッハ予後評定尺度(Rorschach Prognostic Rating Scale; 河合・山本・宇佐 1958; 河合, 1969)や、現実感や刺激障壁機能に関連すると考えられる、自我境界を測る身体像境界得点(body image boundary score)などがみられる。

児玉(2006)は、ロールシャッハの身体像境界得点に基づく自我境界概念と夢体験の関連性を検討している。児玉(2006)の研究では、統計上有意な差は得られなかったが、透過性の低さと悪夢体験の関連の可能性の指摘や境界不明瞭な夢内容の出現が報告された。また、川原(2005)は、SD法による身体感覚とロールシャッハの各指標および自我の強さを測るロールシャッハ予後評定尺度との相関を検討し、身体感覚が認知に反映されることの可能性を考察している。石井(2012)は、自我機能アセスメントとして、ロールシャッハ・テストに加え、TATの有用性について指摘し、TATにおいては、自我機能の「質」の部分のアセスメントが可能であることを指摘している。なお、石井(2012)は、どの検査がどの自我機能をアセスメントできるのかということに言及し、各機能検討についての先行研究を概観している。

3. 自我機能を考える上での「外」と「内」

先述のように、神谷・西原(2006)は自我機能を質問紙においてとらえることの困難さを指摘した。ここで、自我機能概念の測定の難しさの背景要因を、大山(1999, 2001, 2003, 2005, 2009)における自我境界概念の一連の研究を中心に考察したい。

大山(1999)は、Federn(1953)の外的自我境界と内的自我境界の概念を取り上げ、青年の対人行動について検討している。Federn(1953)によれば、外的自我境界とは、外界と自我の間の境界であり、内的自我境界とは、自我と内界(構造論におけるエス)との境界である。大山(1999)は、特に外的自我境界について検討し、1993年度から1998年度までの18歳前後の学生のYG性格検査の「協調性」得点が漸減していることを示した(高得点になるほど協調性が高くなる(大山, 2005))。この点について、大山(1999)は、「外的自我境界の外側はうっかり信用出来ないという不信感、警戒感が高じてきていると見ることができる—中略—互いに接近した時境界の周辺に生ずる異なるもの

落ちつかなさ、居心地の悪さへの耐性が低いか、又はこれを予見して接近を回避している」と述べている。その後、大山 (2005) は更に継続して同様の調査を続けると、2001 年度まで漸減していた「協調性」得点が 2002～2004 年度に上昇した (ただし、漸減中の 1996 年度より低い)。その点について、大山 (2005) は、協調性と同様に測定した「自律性」得点の変動の無さから、自律性に基づく、外的自我境界の外部からの侵入を阻止する機能は一定だったが、外部へ突き出るときの外的自我境界の可逆性に変化があったと試案している。また、大山 (2005) は、2002～2004 年度の上昇は別に考察すべきとしながらも、中村 (2004) の研究において、1986 年度の大学生よりも 2002 年度の大学生は、YG 性格検査に示される D 類 (安定適応積極型) が減少し、E 類 (不安定不適応消極型) が増加していることを指摘した。以上より、外界に対する適応や積極性が現代の大学生において低下していることが示されており、外的自我境界周辺における青年の自我機能の変動についても検討する必要がある。

大山 (2003) は、「個は集団以上に尊重されるべきであり、この存在や要求を公の秩序維持よりも先行させることを是とする風潮」の存在を述べ、この点について、現代青年の対人不安、自己開示の問題として表現されているとし、現代青年に独特の「心の壁」の存在を挙げている。このような「心の壁」について、岡本 (1999) は、Federn の自我構造理論を参考に、現実行動レベル、心理的体験レベル、無意識レベルの各次元を反映する下位検査を 35 名に対し実施している (大山, 2003)。現実行動レベルの下位検査は、対人場面の 4 シーンを取り上げたオリジナルの質問であり、心理的体験レベルの下位検査は、中西・古市 (1981) の EFI-2 における衝動統制、対象関係、刺激障壁の項目である。さらに、無意識レベルについては、ロールシャッハ・テストにおける侵入得点 (Penetration Score) と障壁得点 (Barrier Score)、枠づけ検査を用いた。侵入得点、障壁得点とは、Fisher & Cleveland (1958) によるリューマチ性関節炎患者のロールシャッハ反応によって、検討された概念であり、身体像境界得点と呼ばれるものである。侵入得点は、境界の弱さが言及されたり貫通可能な上面を持つものであり、障壁得点は反応内容の境界が強固な性質をもつものや表面の特徴が強調されるものである (木場・木場, 1980)。

岡本 (1999) は、その 4 種類の機能および自我機能について相関を検討した (大山, 2003)。その結果、無意識レベルとされる侵入得点と、EFI の衝動統制、刺激障壁との間に正の相関が見られた。この点に関し、大山 (2003) は、「刺激障壁と衝動統制が、侵入得点と相関を持つのは、外部刺激への繊細さと感情表出の抑えの利かなさが身体境界の脆弱さと重ねて解釈できる点では妥当」とした。さらに現実行動得点と対象関係に正の相関、枠づけ検査都の間に負の相関が見られた。この点に関し、大山 (2003) によれば、対象関係の項目が対人関係と規定したほうが内容を反映しやすいと思われる項目で構成されていること、現実行動得点が、助けが得られない可能性がある場所への不安を示す項目で構成されていることから、「不安が高いから対人関係を回避すると考えるほうが自然」である。そのため、「EFI-2 の 8 機能がどんな水準で発現されるのかという発現レベルの整合性は詳細な分析を必要とするであろう」。つまり、EFI の示す機能の発現が、外的自我境界の外、外界の水準なのか、外的自我境界と内的自我境界の間の水準なのか、内的自我境界の内、内界の水準なのかを検討する必要があると考えられる。「この研究 (岡本, 1999) は、自我境界が直接現実行動を規定

するのではなく、自我の諸機能を介して間接的に影響を及ぼすことを示し、自我の相対的な優位性や機能を考える上で興味深い」(大山, 2003)。

以上、大山の一連の研究から、自我機能研究の今後の視点が見えてくる。自我機能の測定方法の問題である。つまり、その自我機能測定ツールが自我境界のどの領域で働いているものを測定するものなのかを把握することである。神谷・西原(2006)の指摘も、この点から考察できるのではないだろうか。自我機能は、エス、超自我に対し、自我が取りうる機能であり、またそれは自身の内界や外界からの刺激に対して起こりうる機能である。無意識に葛藤を抑圧することを、自我が機能として行っても、自我意識が明瞭に把握しているとは限らない。内的自我境界周辺、またはその内部で発生、影響する自我機能は質問紙で捉えられないかもしれない。事実、中西・佐方(1989)のEFI短縮版において、信頼性の最も低い自我機能は防衛機能であった。一方で、外界に対する外的自我境界周辺に発生し、影響する自我機能は比較的質問紙で捉えやすいかもしれない。大山(2003)における、EFIの対象関係項目と現実行動との間に相関が見られたことはその一因であると考えられる。

4. 自我機能研究における検討点

以上より自我機能研究において、今後検討すべき問題として以下のことが考えられる。第一は、自我機能を測定した時、それがその個人の特性であるか、状態であるかが不明瞭である問題である。ロールシャッハ・テストが、その場で起きる力動から自我機能を捉えようとする事、その個人の抱える問題によって変動の可能性がある概念であることから、状態か特性かは判断できないと考えられる。しかし、自我について、発達の観点から鑑みた時、Erikson(1950 仁科訳 1977, 1980)の精神分析的個体発達分化の図式や、Tyson & Tyson(1990 皆川・山科訳 2008)の各発達段階における心の状態(eg. 生後2~3ヶ月の社会的微笑、生後7~9ヶ月の人見知り不安、後期青年期の気分の安定など)の出現から、「ここまでは自我が到達している」というベースラインを検討することができると考えられる。また、実際に調査を行った時、その時折の参加者の状態を綿密に把握することで、自我機能の「状態の側面」に影響を与えている要因を考察し検討できるかもしれない。

第二は、自我機能測定法の妥当性についての検討である。3.で指摘したように、自我機能の測定には自我意識が把握していない領域が必ず存在する。そのため、各々の測定法がどの自我境界領域のどのような機能を測定しているかの再検討は必須であろう。また、質問紙法はその簡便さから、多くの資料を集めやすく数量的分析を行いやすいというメリットが存在する。しかし、質問に答えるというその行動には、その時すでに自我の各機能が働いていると考えられ、その要因を取り除くことは難しい。以上から、今後、質問紙法、検査法、面接法のそれぞれから認められる自我機能を、その方法論から厳密に比較、精査し、検討する研究を積み重ねる必要があると考えられる。

第三は、各々の自我機能間の関係は研究されるが、自我機能そのものについての検討が少ない点である。自我機能の概念がBellakをはじめとして、数十年前に確立してしまったことがその背景にあると考えられる。一方で、自我機能の促進因子の検討については、今後進めていくべき研究の一つである。自我機能の促進要因の検討は即ち、心理面接の効果につながると考えられる。この点に

関しては、自我を理論背景とする事例研究を行うことで、考察することが可能であろう。

おわりに

自我機能はその性質ゆえに、測定が難しい。しかし、精神分析的心理療法や力動的な心理療法においては、自我機能の観点からアセスメントやその心理療法の効果の評価を行うことは重要である。そのため、各測定方法を改めて精査し、その測定方法で明らかになる自我機能はどのような自我機能なのか、一方で判定が難しい理由は何故なのかという丁寧な検討を行ない、今後の研究を進めていく必要がある。

馬場・鈴木・竹内・松本・長谷川 (2000) は、Bellak の枠組みをそのまま日本に適用することに対する懸念を述べている。欧米より導入された自我論について、鏞 (2007) は、精神分析の治療関係モデルや治療構造は近代合理主義を土台とした欧米の対人関係のあり方を基礎にしていると述べ、日本向けに修正したアモルフアス自我構造案を提示している。アモルフアス自我構造は、強い自我境界を指摘したものではなく、日本人のはっきりと境界を明確にしない側面から提起された自我構造である。また、鏞 (2007) は、日本的な「アモルフアス自我構造」と西洋的な「中核自我構造」を対比させ、日本人の対人関係場面は西欧よりも複雑になると述べている。以上をふまえると、自我機能概念や自我構造概念も日本特有のものが存在する可能性もある。また、欧米と対比して、自我機能を測定する際に発生する要因がより複雑になっているとも考えられる。自我境界に外と内を規定するならば、現代日本の「個」を重視する風潮 (海野・三浦, 2007) を踏まえ、今後日本的な自我構造を加味した、自我機能を検討していくことは有意義と考えられる。

引用文献

- 馬場禮子 (2006). 臨床心理学キーワード 平等に漂う注意／逆転移／自我機能水準 臨床心理学, 6, 693-695.
- 馬場禮子 (2008). 精神分析的人格理論の基礎—心理療法を始める前に 岩崎学術出版社
- 馬場謙一・鈴木朋子・竹内理英・松本京介・長谷川麻衣子 (2000). 自我機能の発達と病態化の研究 (その1) —自我機能の測定尺度の開発— 放送大学研究年報, 18, 1-10.
- Basu, J., Basu, S. & Bhattacharyya, S. (2004). Ego functions in relation to stressful life events and indices of psychopathology in paranoid schizophrenia. *Psychological Reports*, 95, 1248-1252.
- Bellak, L., Hurvich, M., & Gediman, H. (1973). *Ego functions in schizophrenics, neurotics, normals*. New York: Wiley.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York : W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児期と社会 I・II みすず書房)
- Federn, P. (1953). *Ego psychology and the psychoses*. London : Imago Publishing.
- Fisher, S. & Cleveland, S. E. (1958). *Body image and personality*. Princeton, N.J. : Van Nostrand.
- Freud, S. (1923). *Das Ich und das Es*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag. (フロイト, S. 中山 元 (訳) (1996). 自我論集 筑摩書房)

- 今江秀和・斎藤久美子 (2005). 「自己受容」と「自我機能」 甲子園大学紀要, **9**, 95-111.
- 石井明子 (2012). 自我機能アセスメントにおける TAT の役割の検討 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **12**, 231-244.
- Juni, S., Stack, J. E. & Burton, J. M. (2000). Ego function assessment of substance abusers : Standardization and reliability. *Psychological Reports*, **87**, 1185-1195.
- Juni, S., & Straehle, M. E. (2002). Ego function assessment of nonclinical individuals. *Psychological Reports*, **91**, 679-687.
- Juni, S., & Stack, J. E. (2005). Ego function as a correlate of addiction. *The American Journal on Addictions*, **14**, 83-93.
- 川畑直人 (1985). 自我機能測定に関する研究 : ロールシャッハ・テストと EFI(自我機能調査票)との関係を中心として 日本教育心理学会第 27 回総会発表論文集, **27**, 746-747.
- 川原稔久 (2005). 身体感覚とロールシャッハ法による自我機能との関係 佛教大学教育学部論集, **16**, 163-178.
- 神谷英治・西原美貴 (2006). 心理アセスメントにおける自我機能 椋山女学園大学研究論集 (人文科学篇), **37**, 45-54.
- 神谷英治 (2011). アセスメントにおける心理的能力・自我機能の概念の再検討 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, **10**, 15-21.
- 河合隼雄・山本昭二郎・宇佐晋一 (1958). 「ロールシャッハ予後評定尺度」の妥当性に関する研究 ロールシャッハ研究 **I**, 95-106.
- 河合隼雄 (1969). 精神科学全書 20 臨床場面におけるロールシャッハ法 岩崎学術出版社
- 河合隼雄 (1973). ロールシャッハ・テスト—反応形成の過程と自我機能— **2**, 893-898.
- 北村晴朗 (1981). 自我 蔵永保 (編) 心理学事典 平凡社 pp.278.
- 木場清子・木場深志 (1980). ロールシャッハ身体像境界得点についての基礎的研究 (第 1 報) ロールシャッハ研究, **22**, 33-51.
- 児玉恵美 (2006). 自我境界と夢体験との関連性—身体像境界得点を用いて— ロールシャッハ法研究, **10**, 33-44.
- 楯本知子・金城政史 (2009). 男子大学生の日常生活におけるフロー経験が自我の総合・統合機能に及ぼす影響—経験抽出法(ESM)を用いた検討— 東亜大学紀要, **10**, 31-39.
- 中村 晃 (2004). 大学生の性格における年代的変化 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, **49**.
- 中西信男・古市祐一 (1981). 自我機能に関する心理学的研究—自我機能調査票の開発— 大阪大学人間科学部紀要, **7**, 189-220.
- 中西信男・佐方哲彦 (1989). 成人期の自我機能の発達とカウンセリング—自我機能調査票 (EFI) による検討— カウンセリング研究, **21**, 129-137.
- 岡本絵梨子 (1999). 心の壁 外的自我境界の性質 大山ゼミ論文 (未公開) (大山俊男 (2003) 自我境界と対人不安 大東文化大学紀要 社会科学, **41**, 51-59. より引用)
- 小此木啓吾 (1971). 現代精神分析 II—自我理論と人間のなりたち— 誠信書房

- 小此木啓吾・馬場謙一 (1977). フロイト精神分析入門 有斐閣
- 大山俊男 (1999). 自我境界と対人行動 大東文化大学紀要 社会科学, **37**, 27-35.
- 大山俊男 (2001). 青年期の対人行動と自我境界 大東文化大学紀要 社会科学, **39**, 173-179.
- 大山俊男 (2003). 自我境界と対人不安 大東文化大学紀要 社会科学, **41**, 51-59.
- 大山俊男 (2005). 自我境界と対人行動 (2) 大東文化大学紀要 社会科学・自然科学, **43**, 15-20.
- 大山俊男 (2009). 現代における自我境界の特徴 大東文化大学紀要 社会科学, **47**, 277-283.
- Sohlberg, S., & Norring, C. (1995). Co-occurrence of ego function change and symptomatic change in bulimia nervosa: A six-year interview-based study. *International Journal of Eating Disorders*, **18**, 13-26.
- 杉本浩利 (2002). 「対他的不安」「対自的不安」に影響を及ぼす自我機能についての検討 日本青年心理学会大会発表論文集, **10**, 44-47.
- 宅 香菜子 (2002). 思春期自我発達の促進要因に関する理論的検討—ストレス体験過程の積極的意義に着目したモデル構築の提案— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **49**, 169-179.
- 鑪 幹八郎・一丸藤太郎・名島潤慈・山本 力 (1998). 精神分析的な心理療法の手引き 誠信書房
- 鑪 幹八郎 (2007). アモルファス自我構造という視点—対人関係論から見た日本の臨床— 精神分析研究, **51**, 233-244.
- Tyson, P. & Tyson, R. L. (1990). *Psychoanalytic theories of development*. Yale University Press. (皆川 邦直・山科 満 (訳) (2008). 精神分析的発達論の統合 岩崎学術出版社)
- 海野裕子・三浦香苗 (2007). 「ひとりの時間」の持ち方から見た現代青年期 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **10**, 65-74.
- Weiner, I. B. (1966). *Psychodiagnosis in schizophrenia*. New York : Wiley. (秋谷たつこ・松島淑恵 (訳) (1973). 精神分裂病の心理学 医学書院)
- 山本亮子・中野明德 (2005). 中学生の自我機能に関する研究—自我機能調査票を用いた不適応生徒に対する援助方針の検討— 福島大学教育実践研究紀要, **48**, 97-104.